

C y b e r s p a c e , o r ,  
t h e P o s s i b i l i t y  
t o T r a v e r s e t h e F a n t a s y

サイバースペース、あるいは幻想を横断する可能性

スラヴォイ・ジジェク

Slavoj ŽIŽEK

松浦俊輔 訳  
Translation: MATSUURA Shunsuke

イデオロギーと芸術に関する近年の理論は、  
インターパッシビリティ  
相互受動性[★1]という奇妙な現象に注目した。私の代わりに仕事をする別の主体を通じて能動的になるという意味での「相互能動性／双方向性」に対して、まさに裏返しの現象である。自分の〈目標〉を達成するために人間の情念を操作するヘーゲルの〈観念〉のようなものである（「理性の狡知」）。いわゆる「効果音の笑い声」（笑い声が音声に入れられていて、テレビが私の代わりに笑う、つまり、ショーを見る側のことと受動的な経験を実現し、乗っ取る）のような標準的な相互受動性を避けるために、別の例を出そう。これはファラーからの借用だが、画面の人物が趣味の悪いつまらないジョークを言い、周囲の誰もが笑わないと、自分でけたたましく笑い、「これはおかしかった」とか何とか言い続けるという当惑するシーンである。つまり、自分で世間に期待する反応を実演しているのだ。状況は似ているが、それでもテレビの「効果音の笑い声」の状況とは違う。われわれの代わりに笑う代理人（すなわち、退屈して当惑した世間であるわれわれは、それでもその人を通じて、笑っている）は、見えない人為的な世間という無名の「大文字の〈他者〉」ではなく、ほかならぬジョークの語り手である。彼は、自分の行為を「大文字の〈他者〉」、つまり象徴の次元に書き込むのを確実にするために、そうするのだ。すなわち、彼の強迫的な笑いは、何かにつまづいたりおかしなことをしたときに出さざるをえないと感じる「おっと」というような音と似ていなくもない。後者の例でよくわからないのは、どじった人を目撃しているだけの別の人が、われわれの代わりに「おっと」と言うことも可能だということである——それで、これらの例のすべてで、私は私の本当の位置を代表するある〈他者〉の受動性を保証するために能動的になる。この論文の内容は、この相互受動性、つまりこの私が能動的である一方で、私の〈存在〉の耐え難い受動性を〈他者〉に転移するという不可解な状況が、新しいデジタル・メディアの芸術的な潜在能力を解明する鍵——あるいは少なくとも鍵の一つ——を与えてくれるということである。

S l a v o j Ž i Ź E K  
Cyberspace, or,  
the Possibility  
to Traverse the Fantasy

# 1

私は精神分析指向の（ラカン派の）哲学者なので、まず分析家が立てると予想される問いから始めよう。サイバースペースは、エディプスにとって、すなわち精神分析がエディプス・コンプレックスとその解消として概念化した主観化のモードにとって、どういうことをもたらすかという問いである。今日優勢な通説は、サイバースペースはエディプスの支配を崩壊させる、あるいは少なくとも潜在的に危うくするというものである。サイバースペースは「エディプスの終焉」を意味する、すなわちサイバースペースで生じているのは、象徴的去勢（近親相姦の二者関係を禁止／妨害し、それによって主体が象徴界の次元に入り込むのを可能にする〈第三の媒体〉の介入）という構造から、ある新たなエディプス以後のリビドーの経済への移行だということである。もちろん、この「エディプスの終焉」の認識のしかたは、理論家の立場にもよる。一方には、そこに個人が象徴以前の精神異常的熱狂へ退行し、最低限の批判的／反省的姿勢を維持する象徴的距離を喪失するという非ユートピア的展望（コンピュータはそれに向かって近親相姦的融合の姿勢を楽しむ主体を「飲み込む」母的〈物〉として機能するといった考え方）を見る人——要するに、今日のデジタル化されたシミュレーションの宇宙においては、〈想像界〉は〈象徴界〉を犠牲にして〈現実界〉に重なるという人がいる（ジャン・ボードリヤール、ポール・ヴィリリオ）。他方には、サイバースペースの解放的な可能性を強調する人々もいる。サイバースペースは、性的・社会的アイデンティティが変動し、複数あるような領域を開き、可能性としては、少なくともわれわれを父権的な〈法〉のくびきか

ら解放し、言わばわれわれの毎日の実践的な経験において、かつての形而上学的な対(「本当の〈自分〉」と「人工的な仮面」などの)の「脱構築」を実現する。サイバースペースでは、私はいかなる固定した象徴的アイデンティティも捨てざるをえないのであり、社会=象徴構造における自分の位置によって保証されるかけがえのない〈自己〉という法的／政治的虚構を捨てざるをえない——要するに、この第二のかたち(サンディ・ストーン、シェリー・タークル)によれば、サイバースペースは、かけがえのない「考える実体」としてのデカルト的なコギトの終焉を告げることになる。もちろん、この第二の視点からすれば、シミュラークルの宇宙における精神異常的「エディプスの終焉」を告げる悲観的な預言者たちは、はからずも自らがエディプスに代わるものを想像できないと言っていることになる。

ここに見られるのは、かつての悪しき父権的な秩序の中で、主体の性的アイデンティティが、本人の、ある固定された象徴によるエディプス的な枠組みの内部での位置かつ／あるいは役割によってあらかじめ決定されているという、よくある標準的なポストモダンの脱構築論的説話の一つである——「大文字の〈他者〉がわれわれの面倒を見てくれ、われわれに「男」か「女」かのアイデンティティを賦与してくれて、主体の倫理的な義務はあらかじめ定められた象徴の位置をうまく占めようとする努力に限定される(同性愛などの「倒錯」は、単に、主体がエディプスの経路をくぐりぬけて「正常な」／「成熟した」性的アイデンティティを達成することができなかつたことを示す、いくつもあるしるしと見なされた)。しかし今日では、フォーコーが証明したと言われるように、性のエディプス的機能を支える(権力)の法的／禁止的なマトリクスは後退しつつあり、その結果、主体は、社会=象徴の秩序において、あらかじめ定められた位置を占めるよう呼びかけられているのではなく、主体が異なる社会的・象徴的な性的アイデンティティの間を移る自由、自分の〈自己〉を美的な作品<sup>ワーク</sup>として立てる自由を手にした。今は亡きフォーコーの「〈自己〉への配慮」という概念から、脱構築主義的フェミニズムによるジェンダーの社会的形成の強調にいたるまで作用している動機である。サイバースペースへの言及がこの美的自己想像のイデオロギーに向かう勢いを増すことができるのを見るのはたやすい。サ

イバースペースは、私に、生物学的制約のなごりから解放し、私が自由に〈自己〉を築き上げる能力、アイデンティティが変動して複数あるということまで行ける私の能力を高める……。

しかしながら、いずれの「エディプスの終焉としてのサイバースペース」とも対立して、サイバースペースとエディプス的な主体化のありようとの連続性を説く、数少ない、それでも洞察力のある理論家が何人かいる[★2]。サイバースペースは、介入する〈第三の次元〉の根本的なエディプス的構造を維持している。この次元は、そのまさに媒介／メディア化する当人の能力において、主体の欲望を維持し、他方、同時に、その直接かつ完全な満足を妨げる(禁止)の代理人としてふるまう——この介入する〈第三者〉のせいで、すべての部分的な満足には、根本的な「これはそれではない」が刻まれている。ハイパーリアリティの媒体としてのサイバースペースが象徴の効率を棚上げにし、〈現実界〉と合致する想像のシミュラークルについて偽の全面的な透明性をもたらすという概念、この概念は、ある「サイバースペースという自然発生的なイデオロギー」(アルチュセールを敷衍して)をはつきりと表現しながら、単に象徴界の〈法〉の基本的な配置に依存し続けるだけでなく、それをわれわれの日常の経験の中で、もつとわかりやすくさえる、サイバースペースの実際の機能を偽り隠す。インターネットでのサーフィンという状況、あるいは仮想社会への参加という状況を思い出せばいいだろう。まず、「発話する主体」<sup>サブジェクト</sup>(それをし、話している匿名のX)と「発話されたもの／陳述の主体」<sup>サブジェクト</sup>との間にずれがある(私がサイバースペースで装う、「創作」でき、ある意味でつねに「創作」される象徴によるアイデンティティ——私のサイバースペースでのアイデンティティを記すシニフィアンは、決して直接には「私自身」ではない)。相手側でも同じことが言える。サイバースペースでのやりとりにおける私の相手——ここでは非決定性は徹底的である。私は相手が誰なのか、相手が「本当に」自分で言っているとおりのものなのか、そもそも画面=人格の背後に「実在の」誰かがいるのか、画面=人格は、複数の人格を表わす仮面なのか、同じ「実在の」人物がもつと多くの画面=人格を所有しかつ操作するのか、それとも私は単に、いかなる「実在の」人物も表わさないデジタル化された実体とつきあっているだけな

のか。要するに、<sup>イ</sup>ン<sup>テ</sup>ラ<sup>フ</sup>ー<sup>エ</sup>ィ<sup>ス</sup>とは、まさに私の〈他者〉に対する関係は決して面と向かってのものではなく、つねに間に、迷宮の構造をとる匿名の象徴界の次元としての、ラカンの言う「大文字の〈他者〉」を表わすデジタル装置を置いて媒介(メディア化)されたものである。私は「<sup>フ</sup>ラ<sup>ウ</sup>ズ<sup>メ</sup>ィ<sup>ス</sup>」、メッセージが自由に、定まった目的もなく循環しているこの無限の空間の中でさまよい歩く一方で、その〈全体〉——この巨大な「つぶやき」の循環——は、永遠に私の<sup>コン</sup>ア<sup>リ</sup>ヘ<sup>ン</sup>ジ<sup>ョ</sup>ン理解の範囲を超えたところにある(この意味で、私がいくら総合的想像力を発揮しても包む／理解することができないメッセージとその回路の規模として、「サイバースペースの極致」という原カント的な概念を唱えたいところだ)。さらに、<sup>ア</sup>プ<sup>リ</sup>オ<sup>リ</sup>、そもそも、仮想宇宙を解体するさまざまなウイルスがありうるという可能性は、仮想宇宙においても、「〈他者〉の〈他者〉」はいないという事実、この宇宙は<sup>ア</sup>プ<sup>リ</sup>オ<sup>リ</sup>そもそも首尾一貫せず、それが歩調をそろえて機能する保証はないという事実を指し示しているのではないか。結論は、サイバースペースには、それに固有の「象徴的」な機能があるということに思える。サイバースペースは、その中を自由に循環するためには根本的な禁制かつ／あるいは疎外を引き受けなければならないという意味で、依然として「エディプス的」なのだ——そう、サイバースペースでは、「自分になりたければ何にでもなれる」し、象徴によるアイデンティティ(画面=人格)を自由に選べるが、ある意味で自分を裏切ることになるようなもの、決して完全にはあてはまらないものを選ばなければならない、自分の身代わりとして回路の中を走り回る意味作用する要素によって、サイバースペースの中に再現されることを受け入れなければならない……。そう、サイバースペースでは、「すべてが可能」だが、根本的な不可能性を引き受けるという対価を払ってのことである。インターフェイスの媒介、インターフェイスの「パイパス」を回避することはできず、インターフェイスはあなた(発話の主体としての)を、あなたの象徴による身代わりから、永遠に隔てるのだ。

S I A V O J Ž I Ž E K  
Cyberspace, or,  
the Possibility  
to Traverse the Fantasy

## 2

私の主張は、これらの説はいずれも肝心なところをはずしているというものである。それらは強すぎる(象徴界の〈法〉の一種の精神異常的中断を含むものとしてのサイバースペース)か、弱すぎる(サイバースペースにエディプスが連続していることを措定する)かである。実際には、今日、ある意味で、「大文字の〈他者〉はもはや存在しない」ということである——しかし、どういう意味でのことだろう。この非存在が実際にどういうことなのか、明確にすべきだろう。大文字の〈他者〉については、ラカンによれば、あるところで神と同じである(今日では神が死んでいるということではない——神はそもそものはじめから死んでいたが、神自身がそれを知らなかっただけだ……)。「大文字の〈他者〉が存在しない」ということは、最終的には、大文字の〈他者〉が象徴界の次元であるという事実、直接の物質的因果性とは別のレベルで作動する、象徴界の虚構の次元であるという事実と等価である(この意味で、大文字の〈他者〉が存在すると思う唯一の主体は精神異常者、つまり、言葉に直接の物質的力があると思う者である)。要するに、「大文字の〈他者〉が存在しない」ということは、信じるという概念、象徴を信頼し信用し、他者の言うことを「その顔面どおりに」とするという概念に、厳密に相關している。

マルクス兄弟の映画の一つで、グルーチョが、嘘がばれたときに怒って言い返す。「おまえは誰を信じるんだ? おまえの目か、それとも俺の言葉か」。この一見不条理な論理は、象徴界の次元の機能を完璧に描き出している。この次元においては、象徴による仮面の命令のほうが、その仮面をかぶり、か

つ／あるいはこの命令の出どころとなる個人の直接の現実性よりも重要だ。この機能には、呪物信仰的な否認の構造が含まれている。「私は事物が自分で見ているとおりのものだとすることはよく知っている／この人は墮落した弱い人間だ／しかしそれでも私は彼を敬意をもって待遇する。彼は判事の法服を着ており、彼が何かを言うときは、ほかならぬ(法)が彼を通じてものを言っているのだ」。だから、ある意味では、私は実際に彼の言葉を信じるのであって、自分の目を信じるのではない。すなわち、私は、ものを言っている者の実在性よりも重要な(別空間)(純粋に象徴による権威の領域)を信じるのだ……。だから冷笑的に実はこうなのだと言ったのでは足りない。判事が何かを言うとき、ある意味では、判事という人物の直接の現実性よりも、彼の言葉(法という<制度>の言葉)のほうに真実があるのだ——見えるものだけを見ていると、肝心なところをはずしてしまう。この逆説は、ラカンが「ばかでない者が誤る」と言ったときに意図していることである。自分が象徴による欺瞞／虚構にとらわれるようにせず、あくまで自分の目を信じる人がよく間違ふのだ……。「自分の目だけを信じる」冷笑家が見逃しているのは、象徴界の虚構の実効性、この虚構がわれわれの現実の経験を構造化しているところである。同じずれが、われわれの周囲の人々との最も親密な関係に作用している。われわれは、彼らもいやな臭いを発し、排泄物を出しているなどのことを知らないかのようにふるまう——最低限の理想化、呪物化する否認が、われわれの共存の基盤なのだ。

今日、〈仮想現実〉はもちろん、偽の記録画像を完全に作ることで新しいデジタル化された技術もあって、「あなたの目にとらわれるのではなく、私の言葉(論証)を信じなさい」という標語は、これまでになく現実味をおびている。つまり、ここで肝心なところは、「あなたが信じるのはあなたの目か、私の言葉か」という論理、つまり、「私はよくわかっているが、それでも……／私は信じる／」という論理が、象徴界の虚構の論理と、想像によるシミュラークルの論理という二通りのかたちで機能しうろということを見野に入れておくということである。法衣を着けた判事という有効な象徴による虚構の事例においては、「この人物は墮落した弱い人間であることはよくわかっているが、それでも象徴界の大文字の〈他者〉が

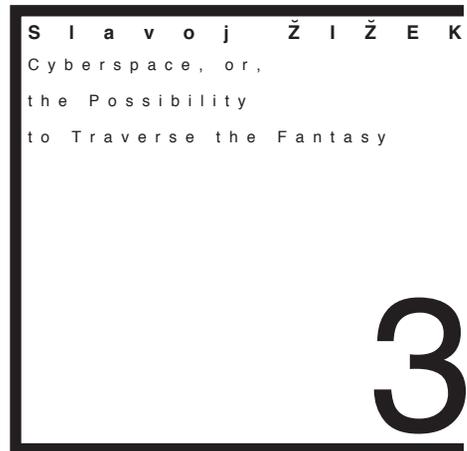
彼を通じて話しているかのように彼を扱う／それを信じる／」のだ。つまり、私は自分の目が教えてくれることを否認し、象徴界の虚構のほうを信じることにする。仮想現実というシミュラークルの場合には、逆に、「私は見ているものがデジタルの仕掛によって生まれる幻想だということはよくわかっているけれど、それでもそこに没入し、それを信じているかのようにふるまうことを受け入れる」——ここでは、私は自分のもつ(象徴による)知識が教えてくれることを否認し、目に見えるものだけを信じることにしている……。

この逆転は、今日、大文字の〈他者〉が存在しないことがはるかに根本的な次元に達しているという事実を示している。ますます基礎が掘り崩されているのは、あらゆる懐疑的なデータに対抗して維持されている、まさにこの象徴に対する信頼なのだ。この、「大文字の〈他者〉の非存在」という新しい状態の、もしかすると最も目を引く面は、技術的発達が進むにつれわれわれの生活世界に影響をもつときに顔を出す、いわゆる倫理的問題について決断を迫られる「委員会」の発生かもしれない[★3]。サイバースペースだけでなく、一方には医療や遺伝子工学、他方には性的嗜好や人権擁護といったさまざまな領域が、適切な倫理的行為についての基礎的規則を考案する必要をつきつけてくる。われわれは、いかなるかたちのものであれ、安全で問題の生じないモラルの重石として使えるような「大文字の〈他者〉」、つまり象徴界の規準点をもっていないのだ。こうした領域のすべてにおいて、意見の対立は片のつけようがないらしい。つまり、われわれはいずれ、単独の普遍的な規則をあてはめることによって拭えない、霧のかかった白とも黒ともつかないところに自分がいるのを見ることになるということだ。こうした場合のいずれにおいても遭遇するのは、一種、量子力学の「不確定性原理」に相当するようなことである。例えばある言明が、実際にセクシュアル・ハラスメントを構成したり、人種差別的な憎悪による発話を構成したりするかどうかを決定することには、構造的な困難がある。そのようなはつきりしない言明を前にとると、「政治的に正当な」急進派は、まずもって、非をならず被害者の方を信じる傾向がある(被害者がそれをいやがらせとして経験したのなら、それはいやがらせなのだ……)のに対し、強硬な正統派リベラルは、告発される加害者の方を信じる(本気でいや

がらせのつもりでやったことでないのなら、それは免罪されるべきだ……)傾向にある。もちろん肝心なところは、この非決定性は、構造的なもので避けようがないということだ。最終的に意味を「決する」のは、「大文字の〈他者〉」(被害者と加害者がともに組み込まれている象徴界のネットワーク)なのであり、「大文字の〈他者〉」の命令は、そもそも結果が決まっているものではなく、誰もその結果を支配し、規制することはできない。だから、行き詰まりを打破するには、結局は恣意的なかたちで正確な行動規則を定めるために、委員会を召集することになる……。それは、医療や遺伝子工学においても(受け入れることができ、さらには望ましい遺伝子実験あるいは介入が、どの地点で受け入れられない操作になるのか)、普遍的な人権においても(被害者の権利の保護が、どの地点で西洋の価値観の押しつけになるのか)、性風俗においても(きちんとした、非父権的な、誘惑の手順とはどういうものか)、いわんやサイバースペースという見るからに明らかな事例においても等質である(仮想社会におけるセクシュアル・ハラメントとは何か、ここでは「単なる言葉」と「行為」とをどう区別するのか)。これらの委員会の仕事は、症候的な悪循環にとらわれることになる。一方では、自分たちの決定を最先端の科学知識(中絶の場合であれば、胎児はまだ意識をもたず、苦痛を感じないなどと教えてくれるようなものであり、不治の病にある人の場合には、それを越えれば安楽死が唯一の意味のある解決であると言える閾を定義してくれるような)の中で正当化しようとするが、他方では、そもその科学的な勢いを導き、それに制限を加えるために、何らかの非科学的な倫理的基準に訴えなければならぬのだ。

まるで「大文字の〈他者〉」の欠如が、主体が自分の責任を転移し、自分の行き詰まりを打破してくれるような公式を提供してくれるものと思われる、数々の「小さな大文字の〈他者〉」としての「倫理委員会」で埋められているかのようなのである。この行き詰まりをうまく例示するのは、性的なやりとりの規則を定めようとするよく知られた「政治的に正当な」営みの逆説的な結果だろう。男は手順を一つ進めるごとに、前もって相手の女に明示的な許可を求めなければならないという規則である(「ブラウスのボタンをはずしてもいいかい」などと)。ここでの問題は二重にな

っている。まず、今日の性心理学者が何度も教えてくれているように、あるカップルが明示的にいっしょに寝るという意志を述べる前からすでに、すべてはさまざまなレヴェルの意志確認、ボディ・ランゲージや視線の交換といったもので決まっており、規則をあらかじめに定めることは、余計なことである。そのため、このような明示的な許可を求めることによって一つひとつ手順を進める手続は、状況を明らかにするどころか、根底的な両義性の契機をもたらし、〈他者〉の欲望という深淵を主体につきつける(「彼はどうしてこんなことを聞くのかしら。もうちゃんと合図を送っているんじゃないか」)。



この大文字の〈他者〉の後退の第一の逆説は、いわゆる「苦情の文化」に見ることができる。その根底にある論理はルサンティマンである。主体は、大文字の〈他者〉が存在しないことを喜んで引き受けるのではなく、その失敗かつ／あるいは無力を〈他者〉のせいにする。〈他者〉が存在しないということが〈他者〉の罪であるかのような。つまり、無力は言い訳にはならないかのような——大文字の〈他者〉はまさにそれが何もできなかったということに責任があるのだ。主体の構造が「ナルシスティック」になればなるほど、主体は大文字の〈他者〉に責めを負わせ、そうして自分がそれに依存していることを確かめる。「苦情の文化」の基本的な特徴は、大文字の〈他者〉に向けられた、介入して事態を正してくれ(損害を受けた性的少数派あるいは少数民族などに報いてくれ)という要求である——まさにそれをどうす

るかが、さまざまな倫理的=法的「委員会」の問題になる。

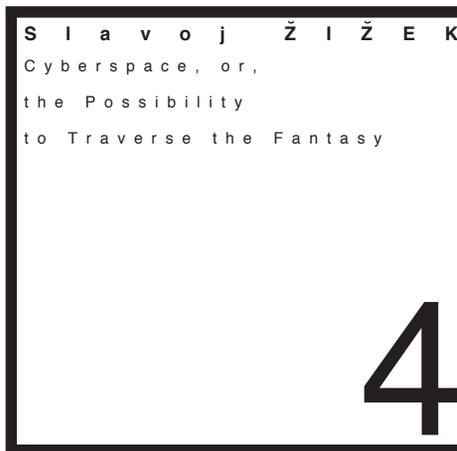
さらに、広い範囲の現象(男女の役割をキリスト教で説くように父権的に再び分割しようと唱える復活する倫理的/宗教的「原理主義」とか、ニュー・エイジ思想の大きな宇宙の再性別化、つまり近代以前の非キリスト教的な性別のある宇宙=存在論への回帰とか、人気のある「認知のマッピング」形式としての「陰謀説」の成長とか)は、この大文字の〈他者〉の後退に対抗しているらしい。こうした現象を、単に新しいかたちの「自由からの逃走、不幸な「過去のなごり」で、あらゆる固定されたアイデンティティを歴史化し、あらゆる自然化された自己イメージの偶然性をあばくという脱構築的な道をさらに断固として進みつけさせれば消えるものとし、「後ろ向き」と言って斥けるのでは単純にすぎる。こうした困った現象によって、むしろわれわれは、大文字の〈他者〉の後退の輪郭をもっともつと細部にわたって詳述せざるをえなくなる。「〈他者〉の非存在」におけるこの変異の——象徴の実効性がますます崩壊することの——逆説的な結果は、ただ象徴界の虚構としてではなく、〈現実界〉に、実際に存在する大文字の〈他者〉のさまざまな面の再登場にほかならない。

〈現実界〉に存在する大文字の〈他者〉を信じることは、もちろん、パラノイアの端的な定義である。そのために、今日のイデオロギーに対するスタンスを特徴づける二つの姿——冷笑的な距離とパラノイアの幻想に対する全幅の信頼——は、厳密に共依存的である。今日の典型的な主体は、いかなる公のイデオロギーに対しても冷笑的な不信を表に出しながら、どこまでも陰謀や脅威や〈他者〉の享楽の過剰な形態についてのパラノイアの幻想にふけている。大文字の〈他者〉(象徴界の虚構の次元)の不信、つまり主体が「それをまともにとる」ことをしないのは、「〈他者〉の〈他者〉」があること、実は、ある秘められた見えない全能の<sup>エージェント</sup>「糸を引いて」おり、舞台を動かしているということを信じるにかかっている。眼に見える、公の権力の背後に、別の、猥褻な見えない権力構造があるということだ。この別の、隠れた代理人が、ラカンの意味での「〈他者〉の〈他者〉」の役、大文字の〈他者〉(社会生活を調節する象徴界の次元)が一貫することの、メタ保証の役を演じている。われわれはここにこそ、

近年の物語化の行き詰まり、すなわち「大きな物語」というモチーフの終わりの根を求めるときだろう。包括的すべてを覆う物語(「自由民主主義の全体主義に対する戦い」など)が、もはやありえないように見える——文学や映画だけでなく政治やイデオロギーにおいても——われわれの時代において、一種の包括的な「認知のマッピング」に達する唯一の道は、「陰謀説」というパラノイアの物語であるらしい——右翼人民主義や原理主義にとつてだけでなく、リベラル中道にとつて(ケネディ暗殺の「謎」)や左翼指向(アメリカの左翼が、かつて、ある謎の政府部局が国民の行動を制御する力をもつ神経ガスの実験を行なっているという概念にとりつかれていたのを見よ)にとつても、この20年間、火の出るようなアクションではなく<sup>プロット</sup>設定で人々の関心を引きつけることのできた映画の大多数は、さまざまなかたちの陰謀説だった。近代化の過程に脅威を感じる、悪名高い「中産階級」のパラノイア的で原ファシズム的反動のような陰謀物語を斥けるのは単純にすぎる。「陰謀説」を、すでに見たような、さまざまな政治的な立場によって流用され、最低限の認知のマッピングを獲得できるようにしてくれる、一種の浮遊するシニフィアンと考えたほうがずっと生産的だろう。

するとこれは、消えたと言われた後でも相変わらず存在する大文字の〈他者〉の一つのかたちなのだろうか。別のかたちのものが、ニュー・エイジの宇宙のユングの再性別化というかたちをとって作動している(「男は火星から、女は金星から」)。それによれば、現代の役割やアイデンティティの混乱という嵐の中の安全な避難所となる、根底に深く礎を降ろした元型的アイデンティティがあることになる。この視点からすると、今日の危機の究極の起源は、固定された性的な役割の伝統を乗り越えることの難しさではなく、男性的、理性的、意識的などの側面を過度に強調して、女性的な、思いやりのあるなどの側面を無視する現代の男におけるバランスの乱れである。この傾向は、反デカルト的、反父権的の偏見をフェミニズムと共有しているとはいえ、フェミニズムの定型を書き換えて、われわれの競争的な男性的機械論的宇宙で抑圧されている元型的女性の根を再確認する——本当の〈他者〉のさらにまた別のかたちのものは、自分の娘にセクシュアル・ハラスメントをする父親の姿であり、これはいわゆる「偽記憶症候群」

のまぎに中心にある。つまり、ここでも、象徴界の権威を代理する者、すなわち象徴界の虚構の体現としての父親が棚上げにされていたのが、「現実の中に復帰する」(このような議論を引き起こすのは、子供時代の性的虐待を思い出すのを支持する人々の、父親によるセクシュアル・ハラスメントは、単に幻想されているにすぎない、あるいは少なくとも、事実と幻想との分かちがたい混合物にすぎないのではなく、紛れもない事実であり、いろいろある家族の大多数において、娘の子供時代に「本当に起こった」ことだという主張である——フロイトのやはり強固な、「原初の父」を殺したのは、人類の先史時代に本当にあった出来事だという主張にも匹敵する強固さである)[★4]。



そこでサイバースペースに戻ろう。これらの紛糾は、サイバースペースに対するいずれの標準的な反応(エディプスの象徴界の〈法〉からの一種の断絶を含むようなサイバースペースと、別の手段でエディプスは継続しているようなサイバースペース)も不十分であるという事情を示しているようだ。しかし、精神分析の臨床においては、第三の、これら両極の間にあるような概念がある。つまり倒錯の概念である。鍵を握る点は、明らかに、倒錯の特定の間状態、精神異常と神経症の間、精神異常者による〈法〉の無効化と神経症患者の〈法〉への組み込みの中間を詳述することである。標準的な見方によれば、倒錯したシナリオは、「去勢の否認」を舞台にかける。倒錯は「死と性」に対する、つまり性差の偶

然的な押しつけと同様、死ななければならないという脅威に対抗する防御だと見ることができる。倒錯した人が演じるのは、アニメの中のように、人間がいかなる激変も生き延びることができるような宇宙である。そこではおとなの性は子供っぽいゲームに帰着する。そこでは死ななければならないということもなく、両性のうちいずれかを選ばなければならないということもない。そういうわけで、倒錯者の宇宙は純粋に象徴界の次元の宇宙であり、シニフィアのゲームが、人間の有限性という〈現実界〉によって妨げられることなく進んでいる宇宙である。

一見したところ、われわれのサイバースペースの経験は、完全にこの宇宙に合っているように見えるかもしれない。サイバースペースは、〈現実界〉の情性によって脚を引っぱられない宇宙でもあるのではないか。その自ら課した規則のみに縛られるのではないのか。しかし、ラカンによれば、この倒錯の標準的な概念が考慮しないまま放置しているのは、〈法〉と、倒錯の最も内奥の構造を特徴づける享樂との間の、ユニークな直結である。時には〈法〉に違反することで(自慰、盗み……)享樂を得るために〈法〉を認め、盗まれた享樂を相手側から奪い返すことによって満足を得るような神経症患者と対照的に、倒錯者は、享樂する大文字の〈他者〉を、直接に〈法〉の代理人に引き上げる。倒錯者の目標は、〈法〉を切り崩すことではなく、それを確立することである。よくある男のマゾヒストは、自分の相手、女王様を引き上げて、出される命令にこちらが従わなければならない〈法〉の制定者にする。倒錯者は、〈法〉の猥褻な裏面のことを重々承知している。彼は〈法〉による支配を立てる身振りのまぎに猥褻さ、すなわち「去勢」から満足を得るのだ。「正常な」事態においては、象徴界の〈法〉が、(近親相姦の)対象に手を出すのを妨げ、それでそれに対する欲望を創造する。倒錯においては、法を作るのはほかならぬ対象である(例えばマゾヒズムでは女王様)。マゾヒズムという倒錯の理論的概念が、「〈法〉にさいなまれることを楽しむ」マゾヒストという、ごくあたりまえの概念に重なっている。マゾヒストは、享樂に手を出すことを禁じる〈法〉の作用の中に享樂を置くのである。

かくて倒錯した儀礼は、去勢という演目、主体が象徴の秩序に入れるようにしてくれる原初の喪失という演目を舞台にかけるが、そこには特徴的なひね

りがある。〈法〉が欲望(の対象への回路)を調節する禁止の作用として機能する「正常な」主体とは違い、倒錯者にとっては、その欲望の対象はほかならぬ〈法〉そのものである——〈法〉は彼が希求する(理想=観念界)であり、彼は〈法〉によってしっかり認知してもらいたいのであり、その機能に組み込まれたいのだ……。このことの皮肉を見逃してはならない。この、何よりも「正常」でまっとうなふるまいの規則をすべて侵すと言われる倒錯者という「違反者」が、実はまさに〈法〉の支配を求めているのだ。倒錯者に関してもう一つ言えば、彼にとっては〈法〉は完全に定まっていない(〈法〉は彼の失われた欲望の対象である)以上、彼はこの欠如を、手の込んだ規則群によって補う(マゾヒストの儀礼を見よ)。決定的に重要な点は、〈法〉と規制(あるいは「ルール」)の対立を念頭に置くことである。後者は〈法〉が不在あるいは棚上げになっていることを証しだてている。

すると倒錯において実際にあやうくなっているものは何だろう。ニューヨークには「私どもは奴隷です」と呼ばれる団体があって、人のアパートの部屋を無料で掃除し、その家の主婦に乱暴に扱われたいという人を提供している。この団体は、掃除をする人を広告を通して集める(その謳い文句は「隷従そのものが報酬です」である)。応募してくる人の大半が、高い報酬を得ている重役や医者や弁護士で、彼らは動機を聞かれると、いつも責任を負っていることがいかに気分が悪いかを力説する——乱暴に命令されて仕事をし、どなりつけられることをこよなく楽しむのだ。〈存在〉への通路を得る手段として彼らに開かれているのはそれだけだからである。ここで見逃してはならない哲学的に大事な点は、〈存在〉への唯一の通路であるマゾヒズムは、近代のカント的主観性、つまり、自己関係する否定性という空虚な点に帰着する主体と、厳密に相関しているということである。カント的転回の射程は、文学史の片隅のある興味深い事例を通じて明らかにすることができる。分身というテーマの見方における突然の変化である。18世紀の終わりまで、このテーマは、ほとんど滑稽な筋立てのもつた(よく似ている兄弟が同じ女性を誘惑するか、ゼウスがアムピトリオンの姿になって、その貞淑な妻を誘惑し、アムピトリオンが突然戻ってくると、彼は寝室から出てくる自分自身

に出くわすとか)、ところが、まさにカント的転回にびったり重なる歴史上の時期に突如として、分身という定型は、恐怖や不安に結びつくようになる——自分の分身に出くわす、あるいはそれにつきまとわれいじめられるというのは、究極の恐怖体験であり、主体のアイデンティティのまさに核心をゆるがせることである。

分身のテーマの恐るべき側面は、したがって、純粹な超越論的統覚、つまり、現実にある客体ではない、実質のない自己意識の空虚としての、カント的主体の登場に関係している。主体がその分身の姿をして遭遇するのは客体としての自分、すなわち自分に並行する「ありえない」客体的なものである。カント以前の空間では、この遭遇はトラウマを残すようなものではない。個人は自分のことをちゃんとした実体で、世界の中にある客体だと考えているのだ。同じことを別の言い方にすれば、自分の分身の中に、遭遇した自分自身という客体の中に、ラカンの対象 *a* を位置づけることである。分身をこれほど不可解にしているもの、それほど他の内的世界の対象とは別にしてしているものは、単にそれが自分に似ているということではなく、「自分の中にある自分以外のもの」、「私」である手の出せない／思いもよらない対象、すなわち私が私の自己経験の現実において永遠に欠いていゝものに実体を与えているということである……。

この仮説を確認するように思われる特徴は、サイバースペースの衝撃が、われわれの社会におけるサディズム=マゾヒズムの身体的営みの地位が変化したことにきっちり相関しているということである。この移動を、精神分析の解釈は芸術作品や宗教体験を病理的な倒錯や神経症や精神異常によって形成されたもの、何らかの無意識の勢いあるいは葛藤を昇華した表現などに還元してしまうという、よくある精神分析批判を参照することによって説明してみよう。この批判にラカンはどう答えるだろう。このような「還元論的」な解釈手順の用語を回避することによってである。彼にとつての問題は、公に認められている象徴による形成物(宗教的幻視、芸術作品など)の根を病理的なリビドーにおいて明らかにすることではなく、逆に、「大文字の〈他者〉」という公の社会=象徴的空間が、どう構造化され、疑いもなく心を病んでいるという特徴を示している当人が大いに尊敬される公人の身分を得るのかということであ

る。古典的な例をとれば、東洋やいわゆる「原始的」な文化でなら、奥の深い神秘的な予言者としてたええられるような風貌をもった女性が、われわれの近代文化ではヒステリー、あるいはさらに精神異常の妄想を抱く者として斥けられるというのはどういうことだろう[★5]。飢えて自らを鞭打つことに強烈な達成感を見る男が初期のキリスト教では禁欲的な殉教者としてあがめられたが、今日ならそういう人はマゾヒストの倒錯者に見えるというのはどういうことだろう。そこにカトリック教会の知恵があったのだ。その制度化された集団の中に、父権的な象徴の〈法〉に還元できない<sup>ジュイサンス・フェミニン</sup>女性的享楽の実践の余地を残すということである(尼僧がその神秘体験を実践することを認められる)。これとはレヴェルが違うが、同じことが現代芸術にも言える。自分の体に穴をあけるという倒錯した儀礼は、10年前でさえ、気味の悪い個人的な奇形として斥けられるだろうが、今日では公に見せられ、芸術的なパフォーマンスとして見せられるというのはどういうことだろう。これが「大文字の〈他者〉」に含み込まれるというのはどういうことだろう。象徴界の〈法〉を切り崩すどころか、〈法〉の支配の確立(立ち上げ)、その人体への書き込みを舞台に上げようとする主体の必死の試みを表わす過程としてのラカンの倒錯(倒錯した儀礼)の概念によって、われわれは最近のマゾヒスティックな肉体的パフォーマンスという芸術の傾向に、新しい光を投げかけることができるようになる——それは〈法〉の支配の解体に対する答え、象徴による〈禁止〉を回復しようとする試みではないのか。それにまた、<sup>ジュイサンス</sup>享楽への直接の(「近親相姦的」)手出しを禁止する能力としての〈法〉が、だんだん効力をもたなくなりつつあるとなれば、〈法〉を維持するために残っている唯一の方法は、それを、まさに<sup>ジュイサンス</sup>享楽を体現する〈物〉と同一のものとして措定することである。

S I A V O J Ž I Ž E K  
Cyberspace, or,  
the Possibility  
to Traverse the Fantasy

# 5

こうしたことがサイバースペースとどう関係するのだろう。サイバースペースは、われわれの最も内奥の幻想を認識する(外部化する、上演する)ための領域を開くと言われることが多い。ここでもやはり、幻想という概念の鍵を握る次元を頭に入れておくことが決定的に重要である。ラカンによれば、シニフィアンの主体は「取消線を引かれた」、空っぽの主体、実定的なく〈存在〉の秩序に支えをもたない、存在を欠くもの=なりそこないなので、幻想が舞台にかけるものは、まさに、主体が象徴界の次元に入ったために失われた、その主体のありえない〈存在〉である。だから、根本的な幻想が受動的で、「マゾヒスティック」で、私を他の人々にはたらきかけられる対象におとしめるのは、不思議なことではない。まるで、最高の苦痛の経験だけが、主体に〈存在〉への通路を保証しうるかのような<sup>ラ・ドゥルル・ラ・ドゥルル・ラ・ドゥルル</sup>である。存在する<sup>デグジステ</sup>苦しみとは、私は苦痛を経験するかぎりにおいてのみ「存在する」ということである。ここまで来たところで、ポスト=デカルトの哲学について簡単に見ておくと、得るところが多い。それは主体という、この自由で能動的で自己措定する代理者が、その自由の尊厳を奪われ、耐え難い苦痛あるいは屈辱の対象におとしめられる〈他者の舞台〉の影につきまわっている。

『啓蒙の弁証法』を締めくくる断片の一つ、「進歩の代償」において、アドルノとホルクハイマーは、19世紀フランスの生理学者ピエール・フルランスの、クロロフォルムを使った麻酔への反対論を引用している。フルランスの主張することは、麻酔はわれわれの記憶を司る神経細胞のネットワークに対してのみ

効くことが証明されるということである——要するに、われわれが生きたまま手術台の上で切り刻まれている間、われわれは恐ろしい苦痛を完全に感じていて、大事なのは、後で、眼がさめた後、そのことをおぼえていないということだ……。アドルノとホルクハイマーにとって、これはもちろん、即時的自然を抑圧することに基づく〈理性〉の運命の完璧なメタファーになっている。その身体、主体の中の自然の部分は、完全に苦痛を感じ、抑圧のせいで、主体はそれを思い出さないというだけのことなのだ。そこに、われわれが自然を支配することに対する、自然からの完璧な復讐がある。われわれは、そうとは知らず自分自身の最大の犠牲者であり、自らを生きながら切り刻んでいるのだ。これを、われわれが自分の能動的な世界への介入の代償を支払う場である間受動性、〈他者の舞台〉という完璧な幻想のシナリオと読むことも可能ではないか。サディスト=マゾヒストは、この苦痛を〈存在〉への通路として喜んで引き受ける。第二の例はカントである、『実践理性批判』の「人間の認識能力が巧みにその実践的本分に順応していることについて」という節で、われわれがヌメナの領域、〈物〉自体への回路を手に入れたとしたら何が起きるかという問いに答えるところである。

「……今、道徳的な心の配置が傾向性と戦わなければならない闘争、心の道徳力が何度か敗北するうちに漸次勝利を占めようとする闘争ではなく、畏るべき尊厳を有する神と永遠性とが、不断にわれわれの眼前に立つであろう。……そこでは大多数の合法的行為は恐怖に基づき、希望に基づいてなされる行為はほとんどなく、義務に基づいてなされる行為は一つもないだろう。また行為の道徳的価値——最高の知恵の目においては人格の価値、さらには世界の価値までもがこれに基づいている——は、まったく存在しないだろう。人間の本性がこのままであるかぎり、人間の行為は単なる機械的の仕組みに変えられるだろう。この仕組みにおいては、いっさいのものは人形芝居のようなもので、うまく身振りは与えられるだろうが、その姿には何の生命も見られないだろう」[★6]。

当然、この、カントが神の即自存在の奇形性を直

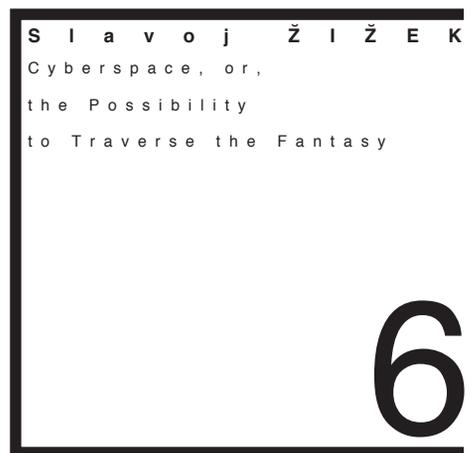
接に見通したせいで、生命のない人形になってしまう人間についての見方は、カント学者の間に相応の居心地の悪さをもたらす(ふつうは口をつぐんで見逃すか、不可解で場違いな異質な身体として斥けられるかである)。カントがそこにこめているのは、自発的な自由な代理者<sup>エージェント</sup>というの、まさにカント的根本幻想とでも言いたくなるようなもの、つまり自由という間受動的〈他者の舞台〉、つまり自由な行為者が、倒錯した神のおかげで生命のない人形に変えられるような〈舞台〉である。その寓意は、もちろん、このような幻想に満ちた支えがないことには、能動的で自由な行為者などない、この行為者が〈他者〉によって全面的に操られているこの〈他者の舞台〉なしにはすまないということである。要するに、カントがヌメナの領域へ直接手を出すことを禁じたことが、ここでもかたちを変えて出てきている。依然としてわれわれの手の届かないところにあるのは、ヌメナの〈現実界〉ではなく、われわれの根本的な幻想そのものなのだ——主体がこの幻想に満ちた核心に近づきすぎると、それは主体の実存の整合性をばらばらにする。

幻想の存在論的な逆説、あるいはそのスキャンダールとも言えるものは、それが標準的な「主観的」と「客観的」の対立を逆転するという事実にある。もちろん、幻想はその定義上、「客観的」(「主体の知覚とは独立して存在する」という素朴な意味での)ではない。ところが、それは「主観的」(主体の意識的に経験される直観に帰着しようという意味で)でもない。幻想はむしろ「客観的には主観的という奇妙なカテゴリー」に属している——「事物が、たとえあなたにはそうは見えていなくても、客観的には実際にあなたにそう見えてしまうという奇妙な見え方である」[★7]。例えば主体が、実際に次々と幻想ができ、それがお互いに数々の組み合わせで相互関係しているのを体験するとき、この連なりは決して完成しない。それはつねに、現実には体験される連なりが、ある根底にある主体によっては決して実際には体験されない「根本」幻想の数々の変異を示しているかのようになる(フロイトの「子供が叩かれる」[『フロイト著作集』第8巻(人文書院)所収]において、二つの意識的に体験される幻想は、第三の「お父さんがぼくをたたいている」という、実際には体験されたことがなく、前提される他の二つの幻想の参照——あ

るいはこの場合両者の中間項——として廻行的に再構築されるにすぎない幻想を前提し、それに関係している)。例えば、あの人は意識的なところではユダヤ人に好意的だけれども、根っこのところでは自分で自覚していない反ユダヤ的偏見を抱えていると言うときには、(これらの偏見がユダヤ人の実際のあり方を示すのではなく、彼らがその人にどう見えるかを示しているかぎり)あの人は自分にユダヤ人が実際にどう見えているかわかっていると言っているのではない。これでわれわれは、「商品の呪物崇拜」の謎に戻ることになる。批判的マルクス主義者が商品の呪物崇拜にどっぷり浸ったブルジョワの主体に出会うとき、マルクス主義者が彼に向ける非難は「商品はあなたには特別な力を与えられた呪術的な対象に見えるかもしれないが、実際は単に人と人の関係を物象化した表現にすぎない」というものではない。マルクス主義者の実際の非難はむしろ「あなたはその商品が自分には単に社会的な関係の体現にすぎない(例えば貨幣は、あなたを社会的生産物の部分たる資格を与える一種の証拠にほかならない)ように見えているかもしれないが、実は事物はあなたにそう見えているわけではない——あなたの社会的現実においては、あなたは、自分が社会的交換へ参加することによって、あなたには商品が実は特殊な力を与えられた呪術的な対象と見えるという不可解な事実を目撃しているのだ」というものである……。

これはまた、ラカンが主体の根幹として「脱中心化」を見たときに意図していたことをはっきりさせる方法でもある。そこで大事な点は、私の主観的な経験が、私の自己経験から見ると「脱中心化された」、私の手の届かないところにある、客観的で無意識な機構によって調節されているということ(唯物論者なら誰もが認めること)ではなく、それよりもずっと落ち着かないことである——私は私にとっていちばん大事な「主観的」経験、つまり事物が「実際に私の目に映るあり方」、私の存在の核をなし、それを保証する根本的な幻想の経験さえ奪われているということである。何せ、それを意識して経験し、それを引き受けることはできないのだ……。標準的な見方によれば、主観性の根幹をなす次元は、現象的な(自己)経験である——私が自分について「私の行為や知覚や思考をどんな未知の機構が支配しているとも、

私から今私が見て感じていることを取り去ることはできない」と言えるときに、私は主体となる。ラカンはこの標準的な見方をひっくり返す。「シニフィアン主体」は、主体の現象的な(自己)経験のある鍵を握る側面(主体の「根本的な幻想」)が、彼の手の及ばないようになって、つまり「原始的に抑圧される」ようになってから、やっと現われるというわけだ。(無意識)は、最も根本のところでは手の届かない現象であって、私の現象的な経験を調整している客観的な機構ではないのだ。そこでわれわれは、ある実体が「内的生命」、すなわち外的な行動に帰着しえない幻想的な自己経験のきざしを見せた瞬間に主体を相手にすることになるという決まり文句とは対照的に、人間の本来の主観性を特徴づけているのは、むしろ両者を分ける溝、すなわち幻想がその最も基礎的なところでは、主体には手を出せないものになるという事実だと言うべきだろう——主体を「空っぽ」(S)にしているのは、この手出しができないということである。われわれはかくて、自らを、その「内的な状態」を直接経験する主体という標準的な概念を全面的にひっくり返すような関係を手に入れることになる。空っぽの、非現象的な主体と、その主体に手が出せないままの現象との間の「ありえない」関係である。



最近イギリスで放映された、あるビールのスポーツCMを考えると、さらにこの枢要な点を明確にすることができる。その第一場は、有名なおとぎ話である。少女が川沿いを歩いていると蛙に会う。それを優しく膝の上に取り上げ、それにキスをする。する

と、もちろん、醜い蛙が奇跡のように美しい青年に変わる。しかし話はそこで終わらない。青年が好色そうな目つきで少女を見やり、少女を抱き寄せ、キスをする——すると少女はびんビールになり、青年はそれを誇らしげに手にする……。女にとって重要なのは、その愛の作用(キスによって表わされる)が、蛙を美しい青年、一人前のファルスの現前(ラカンの分析素では大文字のΦ)へと変えるということである。男にとっては、それは女を部分的な対象、自分の欲望の原因(ラカンの分析素で言えば、対象a)におとしめることである。この非対称のせいで、「性的な関係はない」ことになる。つまりわれわれは蛙をもった女か、びんビールをもった男しかいないということだ——美男と美女の「自然な」カップルを手にするのは決してないのだ……。どうしてだめなのだろう。それは、この「理想のカップル」の幻想の支えが、びんビールをもった蛙という、つじつまの合わない形象だからだ(もちろん、わかりやすいフェミニズム的な論点は、女がその日常の愛の経験で目撃するものは、逆の経過だということになるだろう。つまり人は美しい青年にキスをして、その青年に近寄ってみると、すなわちすでに手遅れになっている段階では、青年は実は蛙だということに気づくというわけだ……。そうすると、これは、幻想が、まさにそれとの過度の一体化によって、すなわち同じ空間の中で同時に複数のつじつまの合わない幻想の要素を抱くことによって、われわれにおよぼす拘束力の足下を崩す可能性を開く。それはつまり、二人の主体のそれぞれが、それぞれの主観的幻想化をしているということだ——少女は実は青年である蛙という幻想を抱き、青年は実はびんビールである少女という幻想を抱く。現代の美術や文学がこれに対置するのは客観的な現実ではなく、根底にある、二人の主体が決して引き受けることのできない「客観的に言って主観的な」幻想、「男と女」あるいは「理想の夫婦」とでも題される、びんビールを抱いた蛙というマグリット風の絵のようなものである(有名なシュルレアリスムの「ピアノの上の死んだらば」[ダリがたびたび用いたモチーフ]というのを思い浮かべるのはどこから見ても正しい。シュルリアリストたちも、あるかたちの幻想の横断を実践していたのだ)。そしてこれは、今日の芸術家の倫理的義務ではないのか——自分の恋人を抱いていると夢想するわれ

われに、びんビールを抱いた蛙をつきつけることである。言い換えれば、主体が決して身に引き受けることのできない、徹底して脱主観化されている幻想を、舞台にかけることである。

とすればこれが、ここまでずっとわれわれが目指していた論点となる。もしかするとサイバースペースは、われわれの最も奥底にある、まったくつじつまの合っていない幻想を外在化するという能力で、われわれの存在の幻想による支えを、決して主観化されない根本にある「サディズム=マゾヒズム」の幻想にいたるまで、舞台にかけ、「演じる」特異な可能性を芸術の営みに開くことになる。われわれはかくて、想像できる中でも最も徹底した経験をあえてしてみよう誘われることになる。つまりわれわれの「メナ的自我」、主体の〈存在〉の<sup>ヘッドコア</sup>とっておきの中核を舞台にかける、他者の舞台との遭遇である。われわれは、この幻想のとりこになって脱主体化された盲目の操り人形になってしまうどころか、それによって、それらを楽しく扱うことができるようになり、かくてそれらに対して最小限の距離をとることができるようになる——要するに、ラカンが「幻想の横断」と呼ぶものを達成することになる。

そこで、(悪)名高いヴァイトゲンシュタインの『論考』の最後の命題に言及して結論としよう。「語りえないものについては、人は沈黙しなければならぬ」である。この命題は、可能な限り簡潔なかたちで、そもそも即自的に不可能なこと(近親相姦の融合)を禁じるエディプス的(法)の逆説を明らかにしている(そしてそれによって、われわれがその禁止を取り除くか乗り越えるかすれば、「不可能な」近親相姦が可能になるという希望をもたらす)。われわれが実際に「エディプスを超えた」領域に移動すると、ヴァイトゲンシュタインの命題は次のように書き直されることになる。「語りえないものについては、人は書かなければならぬ」。もちろん、芸術を、書くという営みの一つのモードと考える長い伝統があり、それは「語りえない」もの、すなわち、ユートピア的で潜在的な、現存の社会=象徴的禁止のネットワークによって「抑圧されている」もの前兆となる。書くということ、あまりに内密でかつ／あるいは苦痛に満ちていて、面と向かった発話行為においては直接に認められないような愛の宣言を伝える手段として用いる伝統も長い。インターネットは、内気な人々の愛の出会いの

ための空間として広く用いられているだけではない、蓄音機を発明したエジソンについての逸話の一つに、彼自身がそれを愛を告白し秘書に交際を求めするために用いたというのがあるのは無視できない(内気で、直接、口に出してそうすることはできなかった)。しかし、われわれが狙っているのは、この、サイバースペースを、われわれが直接に参加していないのだから、すなわち、われわれはそれに対する距離を維持しているのだから、われわれの奥底にある密やかな幻想を自由に外在化し、舞台にかけられると感じるような場所として用いる標準的な経済ではない、われわれの頭にあるのは、もっと根本的なレヴェルで、あの「語りえないもの」というまさに根本にある幻想にかかわるレヴェルのことだ。主体は自分の根本的幻想を引き受けることも、自分をそこにおいて発話行為のパフォーマンスのかたちでは認めることも決してできない。もしかすると、サイバースペースは、主体がそれでも自分の根本的な幻想を外在化し／舞台にかけ、そうしてそこに対する最低限の距離を獲得できるような場を開いているのかもしれない……。

だからといって、われわれに「幻想の横断」を引き起こすことが、サイバースペースに浸ることの自動的な結果だということにはならない。ここですべきことは、むしろ、存在論の行き詰まりに入り込んでいる認識論的な障害をヘーゲルの逆転することである。ここで概略を述べた、サイバースペースのリビドーの経済／象徴界の経済の四つのかたち(エディプスの精神異常的棚上げ、他の手段によるエディプスの継続、(法)の倒錯した演出、幻想の横断)のうちどれが「正しい」のかと問うことが間違い、あるいは誤解のもとだとすれば、どうなるのだろう。これら四つのかたちがサイバースペースのテクノロジーによって開かれる四つの可能性だとすれば、したがって最終的には、選ぶのはわれわれ自身だということだとすれば、どうなるのだろう。サイバースペースのわれわれへの影響の仕方は、技術的特性に書き込まれていないのだ。それはむしろ、つねにすでにサイバースペースのわれわれへの影響の仕方を重複決定する社会=象徴的(権力と支配などの)関係のネットワークにかかっている。

アンネ・フランクから、ソヴィエト連邦を信じたアメリカ共産党まで、そこに識別される理想化の身振りの至高の美を説明するものは、同じ否認ではない

か。スターリンの共産主義がぞつとするものであったことはわかっているのに、それでもわれわれは、英雄的に共産党を信じ、ソ連を支持しつづけ、マッカーシーの魔女狩りの犠牲になった人々を讃える。ここにはたらく論理は、アンネ・フランクが日記の中で、第二次世界大戦中に人間がユダヤ人に対して行なった恐怖の行為があるにもかかわらず人間の究極の善を信じると言っているのと同じである。このような信念(人間が基本的に善であること、ソ連体制の真に人間的な性格)の肯定を崇高なものにしているのは、まさにそれとそれに反する圧倒的な事実に基づく証拠とのギャップ、すなわち、能動的に現実の事態を否認する意志なのだ。 ●

#### ■原註

★1—1996年10月8日から10日にリンツ(オーストリア)で行なわれたシンポジウム「Die Dinge lachen an unsere Stelle(われわれの代わりに物が笑う)」でのロバート・フラーの発言を参照。

★2—Jery Aline Flieger, "Oedipus On-line?" in *Pretexts*, No.1/Vol.6 (July 1997), pp.81-94を参照。

★3—Jacques-Alain Miller and Eric Laurent, "L'Autre qui n'existe pas et ses comités d'éthique(存在しない〈他者〉とその倫理委員会)", in *La Cause freudienne* 35 (février 1997), Paris, pp.7-20を参照。

★4—この父の「現実界への期間」のさらなる側面は、間違いなく、いわゆるキリストの墓かつ／あるいは子孫(キリストがマグダラのマリヤと結婚したことによる)という謎についての人気のある疑似科学にだんだん取りつかれていくところである。南フランスのレンヌ=シャトーあたりの地域と場所も絞られていて、聖杯神話、カガリ派、テンプル騎士団、フリーメーソンなどの一貫した大きな物語に連なっている。これらの話話は《精霊》という象徴による虚構(信者の共同体)の力が衰えるのを、キリストやその子孫という肉体をもった(現実界)で代理しようとしている。

★5—カトリック・クレマンとシュデュール・カカルルは、最近、これと似たような事例についての刺激的な研究、*La folie et le saint*(狂人と聖人)(Paris: Éditions du Seuil 1993)を出している。

★6—Immanuel Kant, *Critique of Practical Reason*, New York: Macmillan 1956, pp.152-153[波多野精一ほか訳『実践理性批判』(岩波文庫)では207頁。ただし、本稿では、この岩波文庫版を参照しつつ、ジエックが引用したものをあらためて訳した]

★7—Daniel C. Dennett, *Consciousness Explained*, New York: Little, Brown and Company 1991。『解明される意識』山口泰司訳(青土社)ただし、本稿では、この邦訳を参照しつつ、ジエックの引用をあらためて訳した]p.132(デネットは、もちろん、この概念を純粋に否定的なで、無意味なとつづけたような矛盾として挙げている)。

スラヴォイ・ジエック—1949年生まれ、哲学、精神分析学、スロヴェニアのリュブリアナ大学教授。著書=『仮想化しきれない残余』『快樂の転移』(青土社)、『為すところを知らざればなり』(みすず書房)、『ヒッチコックによるラカン』(リプロボート)ほか。

まつら・しゅんすけ—1956年生まれ、科学論、名古屋工業大学助教授。訳書=スラヴォイ・ジエック『仮想化しきれない残余』『快樂の転移』、デヴィッド・リンデル『量子力学の奇妙なところがあったほど奇妙でないわけ』(以上、青土社)ほか。

Slavoj Žižek, "Cyberspace, or, The Possibility to Traverse the Fantasy"

© 1997 by Slavoj Žižek